

2021年11月14日(日) 山電 人丸駅 9時30分集合 天文科学館～明石公園

交流会の皆様ようこそ明石においでくださいました。本日はぶらり子午線明石観光ガイドの牧野と小栗が皆様をご案内いたします。牧野さんは神戸の史跡にも詳しく、今回のような企画に得難いガイドです。よろしくお願いします。

今回の企画の視点と申しますか、切り口と言ってもいいのですが、コロナ禍の中、何回か延び延びになってしまいましたが、9月2日の下見の折、齋木憲一様とお話するうちに、ご案内の骨子が浮かんでまいりました。それは①明石と神戸をできるだけ一体化させて考える材料はないものか？②コロナ禍の中で、この明石見学会以降も。参加された皆様方が、興味を持たれたことをこれを機会に歴史を深く探求されるきっかけづくりの材料集めができないだろうか？ そんなことを思いながら日々を過ごしておりました。明石と神戸をつないで考える。皆様が神戸人であるだけに大切な視点だと思えます。そのことを、少し具体的に申し上げます。

私は現在、県立図書館で兵庫津のことを学習する講座を受講していますが、先日、復元された初代兵庫県庁の見学会にも参加できました。

何年か前に清盛を主人公にした大河ドラマがありましたが、今回 山電人丸駅のすぐそばに源平合戦の古戦場跡があります。平 忠度が討たれた史跡があります。これは神戸市の長田にも立派なものが残されています。兵庫津のすぐ近くですからよくご存じではないかと思えます。例えば、この二つの史跡のどちらが本当なのか、歴史の迷い道に入り、コロナ禍の巣ごもりのおうち学習で、いろいろな方の歴史認識を学習される良い材料かなと思えます。

というわけで、一つ目は平 忠度を中心とした源平合戦の戦跡が濃厚に残る地点から出発するわけです。

二点目は伊藤博文に関するものが明石にも遺されている点です。

初代兵庫県庁館には和室に絨毯を敷き、テーブルと椅子が置かれ、ここに初代県知事伊藤博文が来て執務するときもあったそうです。伊藤博文といえば密航留学で英語をものにし「神戸事件」の時、たまたま遭遇し、明治維新で新政府ができたことを外国方に認知する働きを新政府が評価し、兵庫県知事、そして中央官僚になってゆくのですが、現在大河ドラマ「晴天を突く」でもこの人物が登場してきます。

東播磨では、この伊藤博文が、いろいろ活動(暗躍?) したらしい痕跡が残されています。一番有名なのが、播磨町のジョセフ・彦との長崎での接触。長州藩の外交窓口役を引き受けいろいろアドバイスするわけです。しかも無給で! こんなわけで、アメリカの国籍を取りアメリカ人になってしまった為。故郷に帰れなくなった彦のため、県知事の博文が、ひと肌を脱ぎ、故郷の蓮華寺に横文字の墓を建てることのできたのです。兵庫県初代県庁館のすぐ近くに、能福寺がありますが、ここに伊藤博文、豪商・北風正造、ジョセフ彦の親密さを示す石碑や説明版がありました。

この伊藤博文は明石でもいろいろ話題を提供しています。幕末、人丸駅すぐ近くの雲晴寺に同郷の住職がおられ、それを頼りにそこに住み込み、明石藩の情勢をスパイし、寺次とい

う方法で、情報を送っていたということです。橋本海関が「明石名勝古事談」に書き残しています。

三点目として、海関は儒学者で、橋本関雪の父親は神戸にも縁が深い人物です。この橋本海関は神戸とも縁が深く神戸に住んで、で教師をし、この人の息子・関雪の顕彰碑文が大倉山にあるということです。その場所で、関雪が生まれたということは、海関がそこに居住していたということです。この海関の墓などは人丸駅そばの長寿院にあります。

四点目として、伊藤博文の書生としても活躍した伊藤明瑞がこの近くに住んでいたことを申し上げます。最近、天才書家・伊藤明瑞の書力を評価した李王朝高官・**金允植**（きんいんしょく、1835年 - 1922年1月22日）の書が発見され、この解説に十数人の方が協力しひそかな話題になっています。金允植（きんいんしょく）（キム・ユンシク）は、19世紀から20世紀前半にかけての**朝鮮**の政治家・**漢学**者。文集に『雲養集』、『天津談草』、『陰晴史』、『壬申零稿』などがある。**李氏朝鮮**末期から朝鮮帝国初期の政治家・漢学者。

明瑞は5歳の時、明治天皇の前でその書の腕前を披露した人物で、後明治天皇が伊藤博文にこの子の面倒を見るようにと勧め。書生として、伊藤姓を名乗った超天才の童子。博文は日韓併合条約締結以前に暗殺されたが、40歳年下の明瑞をを連れて韓国に渡り、李王朝高官の前でその書力を披歴したことが伺える貴重な資料である。博文は、この一例でも判るように、武力外交ではなく文化外交に力を入れた人物である。明瑞は明石で晩年を過ごし、住居は天文町にあった。

伊藤明瑞を調査研究した人物が同じ町内に住んだ河井高明（故人）で「書家 伊藤明瑞」は図書館で読める。この河井高明氏が力を入れて、人丸神社境内に顕彰碑を建てました。

ついでに、気をつけてみていただくと、橋本海関碑文を書いた石碑がすぐ近くに見られます。

といったような「神戸と明石に共通する人物」という視点、ガイドの切り口を用意いたしましたが、皆様のこんな見方もあるというご意見など、お聞きできたら大変ありがたいことです。

次にコースの道順と見どころなどを書いておきます。

コース ① 両馬川古戦場蹟(平忠度の腕塚 馬塚)→ ②長寿院 (橋本海関) → ③天文科学館 →④人丸神社(柿本人麻呂)→⑤月照寺 →⑥本松寺(宮本武蔵作庭の庭) 妙見社→⑦ 明石神社 →⑧ 明石市立文化博物館 (しび) → ⑨ 明石城 明石公園

## 1 両馬川古戦場蹟(平忠度の腕塚 忠度塚 平経正の馬塚)

かつて両馬川は両側に土手があり、石橋が架かり道は土手の下にあり、北の丘には柿本神社（人丸大明神）が見え、ここからの眺めは明石八景の一つと謳われました。山陽電車人丸前駅の北側に両馬川の細い流れが残っていましたが、現在は埋め立てられています。

腕塚神社縁起には、次のように記されています。

「寿永三年（1184）二月七日、源平一ノ谷の戦いに敗れた薩摩守忠度は、海岸沿いに西へ

落ちていった。源氏の将の岡部六弥太忠澄は、はるかにこれを見て十余騎でこれを追った

忠度につき従っていた源次ら四人は追手に討たれ、ついに忠度は一人になって明石の両馬川（りょうまがわ）まできた時、忠澄に追いつかれた。二人は馬を並べて戦い組討ちとなる。

忠度は忠澄を取り押さえ首をかこうとした。忠澄の郎党は主人の一大事とかけつけ、忠度の右腕を切り落とす。「もはやこれまで」と、忠度は念仏を唱え討たれる。

箆に結びつけられた文を広げると「行きくれて木の下陰を宿とせば花や今宵の主ならまし 忠度」とあり初めて忠度と分かった。敵も味方も、武芸、歌道にもすぐれた人を、と涙したという。

清盛の末弟の忠度は、藤原俊成に師事した歌人であった。年齢は四十一歳。忠度が馬を並べて戦った川をその後、両馬川と呼ぶようになり、つい最近まで山電人丸前駅の北に細い流れが残っていたが、埋められて暗渠（あんきょ）になってしまい、昔を偲ぶよすがもない。腕の病に靈験あらたかだとお参りする人が絶えず、いま神社にある木製の右手で患部を撫でれば、よくなるといわれている。

これは地元の彫刻家が彫って奉納したものである。山電の線路脇に忠度の腕を埋めたという小さい祠があった。昭和五十九年三月、山電の高架化工事のため東三十メートルの位置に移されたものが現在の腕塚神社である。

町名もこれに因んで右手塚（うでづか）町と称していたが、天文町に変更された。時代の流れとはいえ歴史や伝説が消えていくのは惜しい。

地元の天文町右手塚自治会が、年間を通じて献花・清掃などに奉仕しているが、毎年三月の第一日曜日に氏神の神官と共に祭礼を行い、謡曲『忠度』を連吟で奉納して忠度を偲ぶ習わしである。謡曲の奉納は神社が現在地に移ってからであるが、みたまを祭るご奉仕がいつの頃から始まったものか地元の古老も知らないから、その起源は随分昔に違いない。地元民としては子子孫孫に至るまで神社奉仕が伝承されることを切に願うものである。

参考文献 『新明石の史跡』明石文化財調査団編集

人丸前駅の少し西に玉垣に囲まれて建つ腕塚神社があります。かつては、平忠度の腕を祀る小さな祠が山陽電車の踏切の傍にあり、周辺は平家物語に語られている「忠度最期」に因んで右手塚（うでづか）町と呼ばれていました。昭和五十九年三月、山陽電車の高架化に伴って祠は、現在地に移され、町名は天文町に変わりました。

## 忠度塚

腕塚神社南にある閑静な住宅街の一角に玉垣をめぐらせた忠度塚があります。

古くは、忠度塚周辺を忠度町（現・天文町）といい、塚には鎌倉時代の五輪塔が祀られていましたが、江戸時代、明石藩五代藩主松平忠国（在任 1649～1659）が墓所を整備し、明石藩おほかえの儒者・梁田 蛻巖（やなだぜいがん）が碑文を作り、石碑が建てられました。



忠度塚全景

右の説明板の拡大写真

阪神淡路大震災で墓所は倒壊しましたが、住民によって再建され、「平成七年一月十七日午前五時四十六分の阪神淡路大震災により倒壊せる石碑等を修復す平成七年四月十日 天文町町内会 忠度」と刻んだ碑がたち、手水鉢には、正保三年（1646）の年号が刻まれています。

平経正（須磨で亡くなった笛の名手平敦盛の兄、但馬守経正）の馬を埋めたという馬塚  
山陽電車「人丸前駅」北側の歩道上には、平経正の馬を埋めたという馬塚があります。経正は祖父忠盛、父経盛の詩歌管弦の才を受けつぎ、特に琵琶に秀で歌人としては『千載和歌集』に「読み人知らず」として収められ、また家集『経正朝臣集』も遺しています。



経正は幼い頃、仁和寺の宮に稚児として仕え、中国伝来の琵琶「青山（せいざん）」を賜りました。義仲が挙兵した際に、副将軍として北国下向の途上、竹生島を訪れ、竹生島弁財天の前で琵琶の秘曲を奉納すると、弁財天は感にたえかねて白龍となって経正の袖に姿を現したという逸話が「平家物語・竹生島詣」に見えます。北陸道で大敗した一門は、平家館をすべて焼き払い、都を落ちることになります。

その朝、仁和寺を訪れた経正は別れを告げ、戦火にさらされぬようと「青山」を返上します。守覚法親王は別れを惜しみ、自筆の「光明真言」をお渡しになりました。

一旦は九州大宰府まで落ちた一門も、徐々に勢力を盛り返し福原に戻り、東は生田森、西は一ノ谷（須磨）、山ノ手（鶴越麓）に城郭を構えて一ノ谷合戦を向かえました。

経正がどの方面にいて、陣を守っていたのかはわかりませんが、その最期を『源平盛衰記』からご紹介しましょう。

平敦盛の兄、但馬守経正は、身を軽くして逃げのびようと重い鎧を脱ぎ捨て、赤地錦の直垂に小具足姿で長覆輪（ながふくりん）の太刀を帯び、助け船を目指してただ一騎、黄腹毛の馬に乗り、大蔵谷（明石市大蔵谷）へと落ちて行きました。それを見つけたのが、逃げ散る平家の姿をやつきになって探していた武蔵国の住人、庄四郎高家「そこへ落ちて行かれるのは平家の公達と見るが、お逃げになるのか。馬を返せ。返せ。」と追ってきます。

経正きっと見返して「逃げるのではない。東国の荒くれどもを嫌うのだ。」と答えて駒を早めます。すると高家は腹を立て「何という殿のお言葉であろうか。ここは戦場、敵の心情などくんではいられぬ。討てや、者ども。」と主従三騎で馬に鞭を当て、追いつがってきました。経正は「今は叶わじ」と思い、駒から飛び降り、いさぎよく自刃しました。庄氏は武蔵七党の一つ児玉党の嫡流です。

討ち取られた首の髻（もとどり）には都落ちの日に賜った「梵字の光明真言」が結びつけられ、「たとえ朝敵となって首を渡されても、この真言を髻（頭の上に集めて束ねた髪）に結いつけてほしい。」とありました。「梵字の光明真言」は、梵字で記した呪文で、これを誦えれば仏の光明によって諸罪が消滅するといわれています。

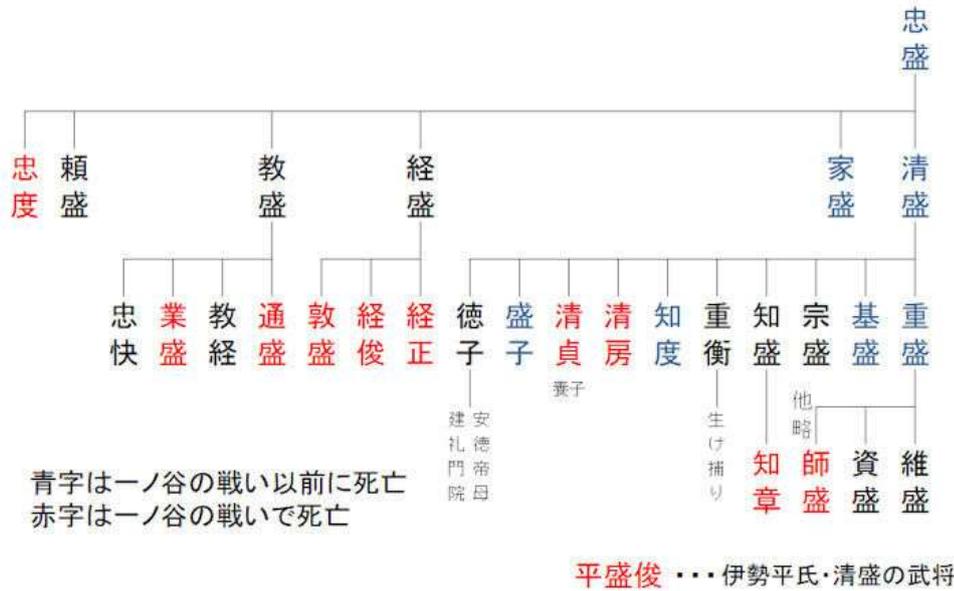
さしもの坂東武者も哀れに思い、首の髻に真言を結びつけたまま、都大路を渡し獄門の木に架けたのち、仁和寺が引き取って骨を高野山に送り、追善供養を行いました。

小具足とは、籠手(こて)・臍当(すねあて)・脇楯(わいだて)など鎧の下の装具をいいます。



長覆輪の太刀とは、柄頭（つかがしら）から鞘尻（さやじり）まで全体に金・銀・錫などで縁取りした太刀です。

平 清盛 経盛 経正 経俊 敦盛 関係家系図



平 経正 (政) 異聞

ひろかずのブログ

加古川市・高砂市・播磨町・稲美町地域の歴史探訪。  
かつて、「加印地域」と呼ばれ、一つの文化圏・経済圏であった。  
[高砂市を歩く\(206\) 経政神社\(阿弥陀町長尾\)](#)

**経政神社 (つねまさじんじゃ・阿弥陀町長尾)**

高御位山の南麓の長尾地区に平家伝説が残る地区があります。話は、こうです。  
一ノ谷の戦いで平家一門は敗れ、多くは海にのがれました。  
平経盛 (清盛の弟) の子、但馬の守・経政は、ついに船に乗り遅れて、仕方なく浜辺を西逃れました。どうしても、逃げるできません。  
とうとう、魚橋村の西はずれから道をかきわけ、山奥に達し腹を切って亡くなったといひます。

平 経俊の情報

一ノ谷の戦いで散った平氏の武将達」の本題である。今回は平清房 (きよふさ) ・清貞 (きよさだ) ・経俊 (つねとし) の3名である。この3人は平家物語によると平知盛の指揮下、

生田の森を守っており、清房、清貞、経俊の三騎で敵陣に突入し、散々に戦った挙句討ち死にした、とある。

討死した平氏の将軍たちの碑や墓所と言われるところは、ほとんどの武将にあるのだが、調べても何故か清房、清貞の碑は何処にもない。唯一、経俊の墳と呼ばれる五輪塔が兵庫区西出町にある西出鎮守稻荷神社にある。

(インターネット 神戸・昼から散歩 より)

## 参考 神戸市長田区腕塚町腕塚堂の情報

平忠度(1144~1184)は忠盛の六男で、清盛の末弟にあたります。

忠度に関わる物語の中で、印象深いシーンは和歌の師・藤原俊成との別れを描いた巻七の「忠度都落の事」、そして巻九の「忠度の最期の事」です。

今回は一ノ谷合戦で忠度が討死する場面を描いた忠度の最期と忠度の腕を埋めたという腕塚堂をご紹介します。

須磨海岸の東に長田港があります。この辺りは一ノ谷合戦で敗れた平家武将たちの多くが海上の船へと逃れたところでした。

この港に近い駒ヶ林町の民家の路地奥に忠度の腕を埋めたという

腕塚堂があります。堂内には忠度の位牌があり、

お堂の傍には忠度を祀る十三重の塔が建っています。

またJR新長田駅近くには、腕塚にちなむ「腕塚町」という地名もあります。

## 長寿院

天文科学館のすぐ南にある長寿院は明石藩主をつとめた越前松平氏の菩提寺です。

もともとは明石藩8代藩主・松平直明の父である松平直良か母の菩提を供養するために越前木本(このもと)に建立したことにはじまります(母の法号が長寿院で、寺の山号「松巖山」は直良の法号)。1682年(天和2年)直明が越前から入封した際に明石へ移転しました。

境内にある「旧明石藩主松平家廟所」には8代藩主松平直明から斉宜までの歴代藩主とその家族の墓があります。墓域中央には、第16代藩主松平慶憲が建てたとされる竜の彫刻が施された豪華な御霊屋があります。

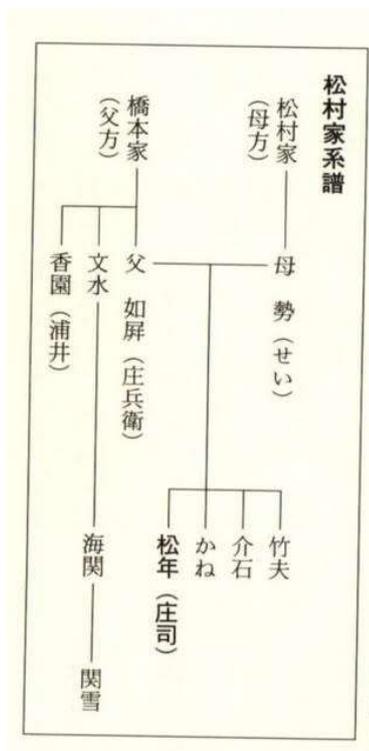
本堂の前の石灯籠と屋根瓦の葵の紋に、このお寺の歴史と威厳を感じます。当時は寺領として70石を与えられ、住職は紫衣や明石城内での下駄履きを許されていたようです。

## 墓地に橋本海関の墓



上の写真は橋本海関の墓の遠景です。「橋本海関先生之墓 丙子十一月建」と刻まれています。橋本海関先生は嘉永5年（1852）生まれで昭和10年（1935）に84歳で亡くなっています。丙子は昭和11年ですので昭和11年11月に橋本海関の長男で日本画の巨匠、橋本関雪先生が建てたもので字も橋本関雪先生によるものです。本墓は関雪開基の月心寺（滋賀県大津市）ですが彼のルーツである明石の長寿院にも分骨され墓が建てられました。戒名：月心院空敞 関雪居士

下の写真は橋本家の系図と親戚の松村家の系図です。松村松年は明石市の名誉市民で昆虫学の大家です。



橋本海関は嘉永5年（1852）明石藩の家臣で儒者の橋本文水・マサ夫妻の子として生ま

れた。母親のマサは藩儒「山内庄右衛門」の長女  
本名は橋本子六。橋本徳有則という号も使用しています。  
生家は明石市天文町の平忠度（ただのり）の塚のある場所の北側（明石村 158 番地）である。

[平忠度塚](#)については小生の Blog を参照してください。

橋本海関の父親の橋本文水は学問方の先生を勤め博学で山水画が上手かった。

橋本海関の祖父は剣術、柔術の武芸の指南役をつとめていました。

橋本海関先生の足跡を年代順に辿ってみたいと思います。

文久 9 年（1861）橋本海関 9 歳 母マサに実家山内家の明石藩士真陽に孟子を勉学  
真陽が亡くなった後は梁田蛻巖（やなだぜいがん）の景德館に入り  
梁田葦洲（やなだいしゅう）に師事しました。

慶応 2 年（1866）橋本海関 14 歳 明石藩講武所詰となり武士道を学ぶ

慶応 4 年/明治元年（1868）橋本海関 16 歳 父橋本文水より詩を学ぶ

明治 5 年（1872）橋本海関 20 歳 敬義館の国語教師に就任

明治 10 年（1877）橋本海関 26 歳 兵庫県師範学校の教師となる

明治 11 年（1878）橋本海関 27 歳 神戸中学校の教師（併任）

明治 xx 年 橋本海関が池田フジ（不二子）と結婚 神戸市中央区楠町に居  
フジは武家の娘であり書、絵、歌、琴等に秀でた才媛で美人であった

明治 16 年（1883）橋本海関 32 歳 長男の橋本関雪が生まれる

明治 21 年（1888）橋本海関 37 歳 妻フジが 5 歳の関雪と妹チエを残し家出  
家出の理由は奇行の多い海関に愛想をつかしたという説と  
フジに愛人ができたという説がある。

5 歳の関雪を育てたのは祖母のマサになります。マサの実家の山内家も  
儒家で漢文や絵を描くことに優れていた。子守唄の代わりに孔子の教え  
の論語を聞きながら海関、関雪が育てられたとのこと。

明治 xx 年 清国大使館書記官の鄭孝胥（ていこうしよ）との出逢い  
横浜で清国の政治家康有為（こうゆうい）の支援（翻訳など）

明治 32 年（1899）橋本海関 48 歳 加古川市尾上町の尼寺に寄寓  
明治 39 年までの 7 年間

明治 40 年（1907）橋本海関 56 歳 明石の天文町に居を移す「赤石三勝」を著作

大正 2 年（1913）橋本海関 62 歳 長男の橋本関雪と孫の節哉を同行して中国旅行  
帰国後「一葦航吟」を著作

大正 9 年（1920）橋本海関 69 歳 郷土の名勝を散策、昭和 8 年まで 15 年かけて  
「明石名勝古事談」を著作

全 11 巻ある著作で明石の郷土史の基礎となっている

昭和 10 年（1935）橋本海関 84 歳 明石の地で没



橋本海関

上の写真は橋本海関先生です。

## 参考情報

### **橋本関雪先生の顕彰碑 in 神戸大倉山公園 on 2012-6-27**

2012年6月27日(水)神戸文化ホールに隣接する神戸大倉山公園にある日本画の巨匠、橋本関雪先生の顕彰碑の写真を撮りましたので紹介します。

橋本関雪先生の解説 By [Wikipedia](#)

橋本 関雪 (はしもと かんせつ)

明治16年(1883)11月10日 -昭和20年(1945)2月26日)

は日本画家である。橋本海関・フジ夫妻の子として神戸市に生まれた。父・海関は橋本文水(播磨明石藩儒)・マサ夫妻の子で学問所詰儒者を務めていた。

本名は貫一。関雪というのは画号であり藤原兼家が雪降る逢坂の関を越える夢を見、その話を聞いた大江匡衡は「関は関白の関の字、雪は白の字。必ず関白に至り給ふべし」と夢占いをしたという。

果たして翌年、兼家は関白の宣旨を蒙ったという故事より父である海関が名付けたもの。

父から漢学を学び1903年、竹内栖鳳の竹杖会(ちくじょうかい)に入り1913年、文展で二等賞、翌年も同じ。1916年と翌年、特選を受賞。帝展審査員を務め1934年、帝室技芸員、1935年、帝国美術院会員、1937年、帝国芸術院会員、1940年、建仁寺襖絵を製作。

中国古典に精通したことで知られ、たびたび中国へ渡った。京都銀閣寺畔の白沙村荘に住み、白沙村人と別号した。白沙村荘の庭園は現在一般公開されている。

庭を営むことが多く大津に走井居、明石に蟹紅鱸白荘、宝塚に冬花庵という別邸を造営した

また、古今東西の古美術の蒐集においてもよく知られる。

1945年に62歳で没し画号の由来となった逢坂の関にある、別邸走井居（月心寺）の墓地に眠る。



上の写真は橋本関雪先生の顕彰碑の全体の写真 in 神戸大倉山公園。  
今は想像もつかないが明治時代中期に橋本関雪先生の生家があった場所に碑が建っていると考えてよい。

**天文科学館 柿本神社・月照寺 本松寺・妙見社 明石神社**

明石市立天文科学館

明石市立天文科学館は1960（昭和35）年、「日本標準時」である東経135度の子午線上に建てられた施設です。天文科学館といえばプラネタリウムは欠かせません。明石市立天文科学館のプラネタリウムはドイツのカール・ツァイス・イエナ社製のもので、100枚以上のレンズと200以上の歯車などを駆使し、約9,000個の星たちを映し出すことができます。惑星や恒星はもちろん、彗星や天の川、人工衛星まで投影することが出来るだけでなく、毎日少しずつ変化する星たちの軌道や、世界各地の星空も正確に再現できる大変素晴らしい機械です。

明石市立天文科学館のプラネタリウムでは平日＝朝10時、土・日・祝日＝朝10時20分から1日5回の上映が行われています。1回の投影時間は約50分ほどで、350名が一度に星空を見ることが出来ます。

### 天文科学館のあゆみ

明石市立天文科学館は1960（昭和35）年6月10日に開館しましたが、そこにいたるまでには50年以上にわたる子午線標識の建設と日本標準時制定の歴史がありました。

日本標準時が制定されたのは、1886（明治19）年のことで、それは、その2年前の1884（明治17）年にアメリカのワシントンで開催された国際子午線会議（本初子午線並計時法万国公会）の決定にもとづいたものです。この会議の決定にもとづき、1886（明治19）年7月12日に、勅令第51号「本初子午線経度計算方及標準時ノ件」が發布されました。

その内容は、

- 一、英国グリニッチ天文台子午儀ノ中心ヲ経過スル子午線ヲ以テ経度ノ本初子午線トス。
  - 一、経度ハ本初子午線ヨリ起算シ東西各百八十度ニ至リ東経ヲ正トシ西経ヲ負トス。
  - 一、明治二十一年一月一日ヨリ東経百三十五度ノ子午線ノ時を以テ本邦一般の標準時ト定ム。
- というものです。

そして、明治21年1月1日午前0時0分に、内閣省地理局観象台から全国の電信局に通報され、日本標準時が使用されはじめました。

#### 明治43年に石の標識

東経135度子午線が明石を通ることを知り、その通過地点に標識を建てることを最初に考えたのは、明石郡小学校長会の人々でした。最初の子午線標識は、1910（明治43）年、教育勅語発令20周年記念事業として計画され、参謀本部の測量地図にもとづいて、相生町の国道筋（現在の明石市天文町2丁目）と、平野村黒田（現在の神戸市西区平野町黒田）の県道脇の2か所に建てられました。

相生町のものは高さ2.72m、平野村のものは高さ2.42m、ともに花コウ岩製で、どちらも現存しています。ところが、その後の経度観測の結果、1915（大正4）年に日本の地図原点である東京麻布の東京天文台の経度がずれている事がわかり、1918（大正7）年に10.4秒、距離にして約267mの修正がおこなわれました。それにもなあって、地図によって決めていた明石の2つの標識は、東経135度から10.4秒ずれることになりました。

しかし、しばらくの間、そのままにされていました。

### 昭和3年の天体観測とトンボの標識

1928（昭和3）年になって、明石中学校（現在の明石高等学校）の山内佐太郎校長の熱心な提唱により、明石市教育委員会は御大典記念事業として、子午線標識を正確な位置を建てかえることを計画しました。

そして京都大学地球物理学教室の野満隆治博士に、子午線通過地の決定を依頼しました。このとき博士は「時刻の基準となる日本標準時子午線の標識は、天体観測にもとづく天文経度によって建てるべき」と考え、その年の夏に1か月かかって明石中学校の校庭で、天体観測を実施しました。

その結果、天文経度の135度子午線は、明石の名勝人丸山の月照寺境内を通ることがわかりました。そこで相生町の石の標識は、天文経度の東経135度より4.046秒、距離にして103m西によっていることがわかり、103m東の相生町巡查駐在所前に移動させました。（平成11年5月に道路拡幅工事で北へ7m移動）

そして1930（昭和5）年に月照寺の正面に新しい標識が建てられました。

この標識は、神戸高等工業学校の古宇田実校長の設計で、当時としては斬新なデザインでした。上部に日本（あきつ島）の象徴であるトンボ（あきつ）が取り付けられていたので、「トンボの標識」として広く親しまれていました。

また、1933（昭和8）年に、神明道路（現在の国道2号）の完成にともなって、弓町（現在の天文町1丁目）の国道北側の歩道上に、コンクリート製の新標識（現在は、天文科学館の案内標識）が建てられました。

### 昭和26年の再観測から天文科学館へ

第二次世界大戦中の米軍の空襲で、トンボの標識も被害を受けましたが、終戦後の1949（昭和24）年頃から子午線標識の復旧のことが市民の話題になってきました。

そこで明石教育委員会は、子午線通過位置の再観測と標識の復旧を計画し、京都大学宇宙物理学教室の上田穰博士に観測を依頼しました。

1951（昭和26）年5月、上田博士の指導のもと、同教室の今川文彦氏、満尾寿男氏が月照寺境内で観測を実施しました。その結果、天文経度の東経135度子午線は、トンボの標識の11.1m東であることがわかり、1956（昭和31）年に標識は現在の位置に移動しました。

この頃から人丸山に国立天文博物館の誘致計画がたてられましたが、文部省の予算面で難航しました。その後人類初の人工衛星の打ち上げが行われるなど、人々の宇宙に対する関心が高まる中、1957～58（昭和32～33）年の「国際地球観測年」を契機に明石市民の意識の中に、明石市独自の天文科学館構想がたてられました。

そして1960（昭和35）年に完工、その年の6月10日「時の記念日」に天文科学館が開館しました。

こうして、東経135度日本標準時子午線の標識を兼ねた地上54mの展望塔と、当時としてはめずらしいドイツ民主共和国（東ドイツ）の大型プラネタリウムを持つ「時」と「宇宙」を展示する科学館が生まれました。

塔頂の南面にある直径6.2mの大時計はいつも正確な時を示し、「時のまち明石」のシンボ

ルとして市民に親しまれてきました。そして、学校教育の天文学習の場として、また、天文に興味を持つ人に最新の情報を提供する社会教育の場として、多くの人々に利用されてきました。

兵庫県南部地震から 40 周年リニューアルオープンまで

ところが 1995（平成 7）年 1 月 17 日、午前 5 時 46 分に発生した兵庫県南部地震（阪神淡路大地震）によって甚大な被害を受け、休館せざるをえなくなりました。

震災の被害で観測室の天体望遠鏡は転倒し、外塔はひびわれ、塔時計は「地震発生時刻」をさしたまま止まってしまいました。

その後、震災復旧工事のため 3 年 2 か月間の休館を経て、1998（平成 10）年 3 月 15 日に、リニューアルオープンしました。

再開後、唯一震災の被害をまぬがれたプラネタリウムは、オープン後も、そのまま使われており、従来と同様に生解説で投影をしています。

また、転倒した望遠鏡にかわって新たに 40cm 反射望遠鏡が設置され、館内は展示内容を一新して、スタートしました。

50 周年を記念し、展示室を全面リニューアル

さらに、より多くの皆様に喜んでいただけるよう「展示室」を全面的にリニューアルし、2010（平成 22）年 5 月 29 日に新たなスタートを切りました。そして、2010（平成 22）年 6 月 10 日「時の記念日」に、当館は開館 50 周年を迎えました。

これからも、多くの方々に東経 135 度子午線に位置する明石市立天文科学館で、「時」と「宇宙」の素晴らしさを感じていただければ幸いです。

プラネタリウム（Planetarium）とは、プラネッツ（Planets、惑星のこと）の動きを表現する機械という意味でしたが、現代のプラネタリウムは、丸いドームスクリーンに実際とそっくりの星空を投影し、惑星だけではなく、ひと晩の星空の変化や、季節による星空の移り変わり、そのほかいろいろな天体現象を投影する装置を言い表すようになりました。

そしてこの外来語も、今ではすっかり日本語として定着しています。

このプラネタリウムの原形は、ドイツ、ミュンヘンのドイツ博物館長オスカー・フォン・ミューラーの発案によって、ハイデルベルヒ天文台長マックス・ウォルフが設計したもので、それをもとにイエナにあるカールツァイス社のバウアースフェルトが、1923 年に作ったのが最初です。

その後、改良が加えられ現在のような型式になったのは 1925 年で、その年の 5 月 7 日にドイツ博物館で初めて一般に公開されました。

## 柿本神社と月照寺

弘法大師(こうぼうだいし)空海(くうかい)が弘仁 2(811)年 に現在お城のある赤松山に湖南山楊柳寺を建立(こんりゅう)しました。仁和 3(887)年 寺の住職 覚証(かくしょう)が

夢のお告げを受け、寺の南に柿本人麻呂を祀(まつ)る祠(ほこら)をつくりました。ちょうどそのころ、人麻呂をお祀りしていた大和(やまと)の柿本寺が廃寺(はいじ)になり、本尊(ほんぞん)の船乗十一面観世音をゆずりうけ、寺中に観音堂を設け海上安全を祈り、また、寺内に人麻呂の祠を建てて寺の鎮守とした。その時、寺の名前も月照寺(げっしょうじ)にかえました。

元和(げんな)4(1618)年現在地に明石城が立てられるに際して、人丸社は、新城の鎮守社として本丸に祀られ、一般人の参拝のため、別に東の山に人丸社が新築され、別当月照寺も並びに建てられました。人麻呂1千年祭の享保8年(1723)に『正一位柿本大明神』の神位神号を宣下され、女房奉書を賜った。以後、ますます人々から崇敬されて寄進も多く、後桜町天皇(18世紀中期)の宸翰(しんかん・天子の書いた文書)短籙(たんざく)など仁孝ニシコウ天皇(19世紀前期)宸翰短籙など数十葉(国の重要文化財)。森狙仙 筆 絵馬『猿の図』(明石市指定文化財)がある。

### 拝殿の西にある紀功碑

廃藩置県によって士族が平民となった記念碑で橋本海関の文を元に作られた。

盲杖桜の碑文は故 上月乙彦氏が。

『あかし昔話』にはこんな話がある。

昔一人の盲人が九州筑紫からこの社へ詣でて17日間人麻呂塚におこもりし、満願の日に『ほのぼのと まこと あかしの神ならば 一目は見せよ 人麻呂の塚』と神前でよみあげた。すると一瞬ぱっと目が開いたがすぐもとにもどってしまった。そこで今度は7日間のおこもりのあと 『ほのぼのと まことあかしの神ならば われにも見せよ 人麻呂の塚』と読み直すとすっかり、目が開いた。

### 柿本神社

柿本人麻呂を祭った神社。人麻呂は持統(じとう)・文武(ぶんぶ)朝(687~707)の時代に活躍した宮廷歌人(きゅうていかじん) 万葉集(まんようしゅう)にたくさんの歌がのこされています。

あまさかる ひなのながぢゆ恋ひくれば  
明石の門より やまとしまみゆ  
ともしびの 明石大門に入らむ日や  
漕ぎ別れなむ 家のあたりみず  
(月照寺 境内に歌碑)

あしびきのやまどりのおのじだりおの  
ながながしよをひとりかもねん  
(百人一首 人丸山公園に歌碑)

### 人麻呂のエピソード

歌の名人を困らせてやろうと、朝廷から、「焚(た)かぬ火の灰」という難題(なんだい)がでました。人麻呂も困り果て、明石の海岸で物思いに沈んでいました。

するといつの間にか船に乗った白髪の老人が近づき、「夜もすがら・・・」とつぶやいた。人麻呂ははたと気がつき、

『夜もすがら 沢井（さわい）に もゆる蛍火（ほたるび）の

あくれば草にはいかかるらん』 とつづけた。

蛍が這（は） いかかると灰（はい） かかるの掛詞（かけことば）で難題を切り抜けました。お礼を言おうとふと気がつくと、船の翁（おきな）ははるかに淡路の島影（しまかげ）に消えようとしています。

ほのぼのと 明石の浦（うら）の あさ霧（きり）に

島隠れ（しまがくれ） ゆく 舟をしぞおもう

このときおもわず、人麻呂の口をついて出たことばだと言い伝えられています。

### 亀の碑（幕府学問所大学頭 林春斎撰文）

柿本人麻呂を和歌の宗師として崇め、事績を顕彰する伝記が1712字の漢字で記されています。六代明石城主 松平信之（まつだいらのぶゆき）が1664年に建立（こんりゅう）しました。これを一気によみくませば、台座の亀が動くといわれています。

この甲羅（こうら）を持つ動物には耳があります。実際の亀にはそのような耳はみられません。このなどを調べた私たちガイドの仲間の小林さんは、これは竜の9匹の子どものうち第一番目の ひき というものだと言ってくれました。ひき はいまでも ひいきにする えこひき ということばにのこっています。重い荷を背負うのが好きで親の竜から特別かわいがられました。ひいきされたのです。

#### 参考

- |      |                        |                    |
|------|------------------------|--------------------|
| 2 番目 | りふん（高いところへのぼる意）        | 屋根で見張りをする獣の姿をしています |
| 3 番目 | ほろう（ほえる という意）          | 鐘をつるす金具            |
| 4 番目 | へいかん（威圧する意）            | 獄門に立つ              |
| 5 番目 | とうてつ（食を守る）             | 料理のかなえのふたにつく       |
| 6 番目 | はちか（橋を守る）              | 水がすきで怪魚の姿          |
| 7 番目 | がいさい 剣のかざり             |                    |
| 8 番目 | しゅんげい 香炉のつまみ 獅子のすがた    |                    |
| 9 番目 | しょうず 門番、ドアのノブにつく 蛙のすがた |                    |

## 西海千尋の円筒句碑

### 影たのめ この涼しさの 柿の本

人丸神社の山門前、東端に直径40センチ高さ1・5mばかりの円筒状の句碑が建つ。そこに西海千尋のこの句が刻まれている。黒田義隆著の明石市史（上）によると、中尾に住み藩命によって備前へ陶器研究に赴いたこともあるという人物。俳号が千尋で名は小次左衛門嘉永元年（1848）6月10日82歳で永眠。句碑は死後建てられたという。

生前は播磨で蕉風の流れをくむ松岡青羅門下の西嶋村庄屋・卜部起蝶などとも交流があり、その一門が西端に再建した芭蕉の蛸壺塚の碑があり、明石の文学名所と同時に明石海峡大橋がまじかに見える絶景のスポット。

明石玉や地元明石の焼き物にも詳しい竹中敏幸氏は西海家から小倉家に養子に入ったという両家の結びつき示唆してくださった。なるほど 木村二郎編著「明石ゆかりの人物事

典」によれば西海千尋は 陶芸家・小倉千尋（1900～1962）の曾祖父に当たるといふ。代々焼き物業を生業としてきた西海家に生まれたが、小倉家に養子に入り、陶芸家の道に進み、その子息・小倉健（1942～）も陶芸の道を進み、作品は高い評価を受けている。西海千尋の窯業と俳句の両道の歴史をもっと掘り下げてみたいものだ。 文 明石ペンクラブ 小栗秀夫

## 芭蕉句碑

蛸壺塚(たこつぼづか)

松尾芭蕉(まつおばしょう)の俳句

蛸壺や はかなき夢を 夏の月

を刻んだ句碑(くひ)のことをいいます。

芭蕉が明石に来たのは貞享(じょうきょう)5年(1688)のこのようです。

なぜ、そんな昔の事が分かるかといいますと、芭蕉はあちこち旅(たび)をして、その旅の事を書き残しています。それを紀行文(きこうぶん)といいます。

芭蕉の残した紀行文では、「奥の細道(おくのほそみち)」「野ざらし紀行」「笈の小文(おいのこぶみ)」が特に有名です。そのうちの「笈の小文」に明石に来た事が記されています。

そのほか 芭蕉の句碑は市民会館 南庭に

かたつむり 角ふりわけよ 須磨明石

天文科学館前に ほととぎす 消え行く方や 島一つ があります。



蛸壺や はかなき夢を 夏の月

出典は『猿蓑』。

『笈の小文』に「明石夜泊」とあるが、芭蕉は明石に泊まっていない。

この海見たらんこそ物にはかへられじと、あかしより須磨に帰りて泊る。

窪田猿蓑伊賀上野の富商。通称は惣七郎宛書簡（貞享5年4月25日）

## 人麿山 月照寺

総建坪400坪余。この地に移転以来、380年の風雪に耐え、桃山建築様式の遺構を伝えておりましたが、平成7年におきました阪神淡路大震災で全壊。3年後の平成10年に再建。屋根瓦は菊の紋で、勅願寺として栄えた歴史を伝えている。本堂は日本標準時子午線上にあ

る。

## 月照寺山門 明石市指定文化財

伏見城の薬医門 明石城の切手（きって）門として二役を果し、明治初年ここに移された。秀吉建立の歴史をきざむ豪壮な風格の山門である。



人丸観音と水琴窟（山門内）

山門内庭に洗心水の池があり、水琴窟が妙なる音色を奏でている。その池の傍らに、北村西望氏作の人丸観世音菩薩の立像が安置されている。この尊像は身丈2メートル10あって月照寺の鎮守神、柿本人麿にちなんで「人丸観音」と名付けられた。この尊像を寄進したのは檀家の（故）梅沢きよのさんであります。

## 八房の梅

赤穂四十七士の一人、間瀬久太夫正明が大石内蔵助良雄と共に当寺に参詣して、素願の成就を祈り、持参の鉢植の梅を手植したのがこの梅である。この梅は一つの花に八つの実がなるので「八房の梅」と名づけられた。

## 観音堂（本堂東隣）

昭和54年再建。人麿念持仏、海上波切船乗十一面観世音菩薩を安置し、明石海峡を往来する船の海上安全を守っています。この像は聖徳太子の御作、持統帝の念持仏で、人麿が帝から賜ったものです。波を切る船に乗った観音立像1.7メートルで60年に一回開扉し、平素は秘仏である。

## 本松寺・妙見社

**本松寺.** 慶長元（1596）年に建立され、のちに現在の地へ移されました。境内の庭園はひょうたん形の枯池に亀出島を配した枯山水で、宮本武蔵作と伝えられています。

西隣の**妙見社**はツツジの名所として知られ、4月末から5月中頃にかけて社内一面に元禄4年(1691年)、明石藩家老・斎藤甚左衛門の尽力により、船上城下にあった本正寺がこの地に移され、**本松寺**となった際、斎藤甚左衛門が妙見菩薩像を本松寺に寄進。この妙見菩薩像を祀って創建されたのがこの社で、本松寺の鎮守社でした。幕末の神仏分離令により本松寺から独立しています。

## 本松寺庭園

庭園様式 枯池式枯山水庭園

作庭時代 江戸時代前期 (伝宮本武蔵作庭)

人丸山の西坂を登っていくと右手に日蓮宗「法栄山本松寺」、続いて鎮守「妙見宮」がある。本松寺は又の名を「谷の妙見」「萩の寺」とも呼ばれ正面に古びた石階段、巨石の御首題碑、山門と続く。本道を正面に番神堂、納骨堂（もと鐘楼堂）、庫裏が並ぶ。

本松寺は慶長元年（1596）に豊臣秀吉の家臣藤井与次兵衛（新右衛門）勝介が林崎の船上城下に建立した。当初は「本正寺」といい、審理院日甫聖人である。慶安四年(1651)の松平忠国(明石藩主)の国印状には、「本正寺」に八石六斗と畑一反二畝を贈ったとあり、貞享三年（1686）には松平直明が「本松寺」に同高を贈った記録もあり、この頃寺名が変わったようである。

元和三年（1617）小笠原忠政が信州松本から明石に移封され、現明石城の築城、それに伴い町の中心も明石川以東へ移った。当山も有力な檀徒の尽力により、元禄四年（1691）に現在の地に移転した。この地はかつて全久山東長寺跡で、その後三乗寺、更に清水寺が入り、移転当時は空き寺になっていた。古文書に「大蔵谷の分、空寺・・・」とあり、今も東の谷を東長寺谷といわれるのはその名残である。

庭園は本堂を背に庫裏書院に面した枯池式枯山水庭園である。もと離れ座敷が西方にあり、庭は書院や離れ座敷を視点にした作庭である。

浅い枯池を穿ち、軽い築山を東西二箇所築いている。そして谷を溪谷にして枯流れとし、切石橋が架かる。また二つの築山には、それぞれ大小の二つの枯滝を大滝・小滝として組み大滝には水分石を池中に据えている。池泉は瓢箪型で、降雨の時のみ水が溜まるという枯池である。手前に出島があるが、亀出島である。護岸は池が浅いために一段の護岸石組を組んでいる。石橋は自然石が架かるがもとは櫟の橋であった。全体的に見て、石組は小振りであるが、平面構成を重視し、視点による変化をもたせたまとまりの良い作庭といえる。

作者は、宮本武蔵と伝えられている。他に武蔵作庭と伝わるのは、旧明石藩下にある福聚院、

円珠院、雲晴寺・明石公園で、そのうち福聚院・円珠院には、本庭と池泉の形、大小二滝からなることなど共通する所が多く、同じ作者の可能性が高い。雲晴寺は平成十六年の本堂再建築の再、庭園跡が出土し、移築中である。また、明石公園は位置は変わったが平成十五年復元された。

武蔵は、元和四年築城の始まった明石に来て小笠原家の客分となる。この時に、明石城下の町割りとともに樹木屋敷の作庭をしたことは文献上間違いなく、同時に寺院の作庭にも当たった可能性は高く、そうした面からも貴重な一庭と考えられる。

(庭園研究家、西 桂 記)

## 明石神社の概要

明石神社 (あかしじんじゃ)

正式名称：明石神社

御祭神：徳川家康 / 配祀：松平直良、松平直明、宇賀之御魂命

創建年代：天和2年 (1682)

鎮座地：兵庫県明石市上の丸一丁目 20-7

社格等：旧郷社

### 【御由緒】

明石松平家は越前松平家の分家で、結城秀康の六男で越前大野藩主となった松平直良を祖とします。その子・松平直明が明石藩主となり、明治維新まで続きました。

明石神社は天和2年 (1682)、松平直常 (直明の子) が城内に徳川家康と松平直良、直明を祀ったことに始まるとされます (兵庫県神社庁のサイトなど)。

ところが、松平直常が藩主となったのは元禄14年 (1701)、天和2年は松平直明が明石藩主として入封した年です。とすれば、天和2年に明石城に入った直明が城内に徳川家康 (東照大権現) を祀り (家康は直明の曾祖父)、直常の代に明石松平家の祖となる直良・直明を合わせ祀ったと考えるのが妥当ではないでしょうか。本来の名称は東照宮だろうと思われま

す。江戸時代は一般の参拝が禁じられていましたが、明治4年 (1871) その禁が解かれました。廃藩置県に伴うものではないかと思えます。同19年 (1886) 明石神社と改称、同23年 (1890) 郷社に列せられます。同31年 (1898) 明石城一帯が皇室の御料地となったため移転計画が進められ、大正7年 (1918) 現在地に遷座しました。この時、人丸山にあった護穀神社を合祀しました。

平成7年 (1995) の阪神淡路大震災で社殿等が半壊。資金面での問題があったようで、再建は進みませんでした。しかし同18年 (2006) 明石市から旧社殿の撤去命令が出たことをき

っかけに進展し、鉄筋コンクリート造の新社殿が再建されました。平成20年か21年のこと  
と思うのですが、確認できていません。

### 再建前の明石神社と新築の明石神社



左 荒廃し、再建される以前の社殿。明石市の指定文化財である明石城太鼓が置かれていました。

明石城公園の東に位置する明石神社は、明石藩の第9代藩主・松平直常公が、祖父で越前松平家の始祖である松平直良公、その末子で本多政利公に替わって1682（天和2）年に第8代藩主の座に就いた父・松平直明公、松平直良公の祖父で江戸幕府の初代将軍・徳川家康公を祀った祠を明石城の城内に建立したのが始まりといわれています。

1682（天和2）年創建と伝えられていますが、松平直常公が創建したという話が正しいとすれば、松平直常公が家督を継いで第9代藩主になった1701（元禄14）年以降の創建とも考えられます。この祠は松平家の守護社として祀られ、一般民衆が参拝することは許されていませんでしたが、1871（明治4）年になって廃藩置県によってこの禁制が解かれ、一般の人々も参拝できるようになりました。

この祠は、1886（明治19）年4月には「明石神社」という名が付けられて人々の崇敬を集めていましたが、1898（明治31）年に明石城一帯が御料地となったことから移転計画が進められ、20年経った1918（大正7）年に現在地への遷座が行われました。この時に人丸山にあった護穀神社が合祀され、豊受大神や金山彦大神も共に祀られるようになったそうです。

## 明石市立文化博物館

<https://akashibunpaku.com/index.html>

明石市立文化博物館 所在地〒673-0846 明石市上ノ丸2丁目13番1号 TEL078-918-5400

開館時間 | 午前9時30分～午後6時30分（入館は午後6時まで） 休館日 | 毎週月曜日

（国民の祝日又は休日及び特別展開催期間中を除く）、年末 ...

常設展では、明石の歴史と文化を「人々の歴史と自然環境」と題して8つのテーマで展開。年に数回企画される特別展も、毎回趣向をこらした興味深いテーマで人気があります。

料金/おススメメニュー(税込): ○観覧料大人 200 円

企画展 発掘された明石の歴史展～明石の古道と駅・宿～

10月30日～12月5日まで開催 毎週 月曜日休館

## 入り口 前のモニュメント 鴟尾(しび) について

鴟尾(しび)とは、宮殿や仏殿などの大建築の瓦葺屋根の大棟(おおむね)の両端に取り付けられた鳥の尾の形の飾りのことを言う。訓読みでは「とびのお」と読む。沓(くつ)に似ていることから沓形(くつがた)とも呼ばれている。

明石市立文化博物館の展示解説シートによると、日本の瓦の歴史は、6世紀中頃に、仏教伝来とともに始まった。

その後播磨地方では多くの寺院が建てられ、それに関連して瓦を焼く窯も造られ6～8世紀において須恵器とともに瓦の生産を行った。その中でも「鴟尾」と呼ばれる瓦が目される。

鴟尾は、古代中国では、もともと海の魚で浪を噴き出し雨をもたらすと信じられ、防火のまじないとして使われていたようである。瓦製の他に金銅製、石製、鉛製、木製のものもあった。

古代の鴟尾は胴部やまわりを縁取る鱗(ひれ)部などを、段型に削り出しているものが多く見られる。

明石市大久保町高丘の高丘3号窯より出土した鴟尾は、代わりにへらで沈線(ちんせん)を施している。製作された年代は、ともに出土した須恵器から7～8世紀初めと考えられている。館内に展示されているものはモニュメントより4倍ほど大きい。

この鴟尾とよく似たものが、大阪市の四天王寺より出土しており、その当時、四天王寺への供給があったと考えられる。

展示のものは赤色で壊れた破片をつなぎ合わせてもの。焼き上げる途中で登り窯がどこか壊れたのか焼き上がらず、壊して捨てられた破片をつなぎ合わせている館内には登り窯の模型を見ることができる。

鴟尾は瓦の中では特に大きく重いので正確に焼き上げることは容易でないので、当時の工人集団が、その製作工程を把握・管理する高い技術を持っていたことが分かる。鴟尾はその後、鬼瓦へと移り変わっていく。

昔の技術は大変優れたものがあります。建設された後、何百年間も保存され現代

の我々の前にその姿を見せてくれている城や寺院などがあります。

連綿と続く技術の伝達は今後も大切にして欲しいと思いますが、日本は少子高齢化を迎えて後継者不足に悩んでいます。この解消には当然のことながら政治力が必要です。福祉も大切でしょうが、技術の伝承者にたいする保護・保障も必要なのではないでしょうか。

## [明石城 | 明石公園](https://hyogo-akashipark.jp/aboutcastle)

<https://hyogo-akashipark.jp/aboutcastle>

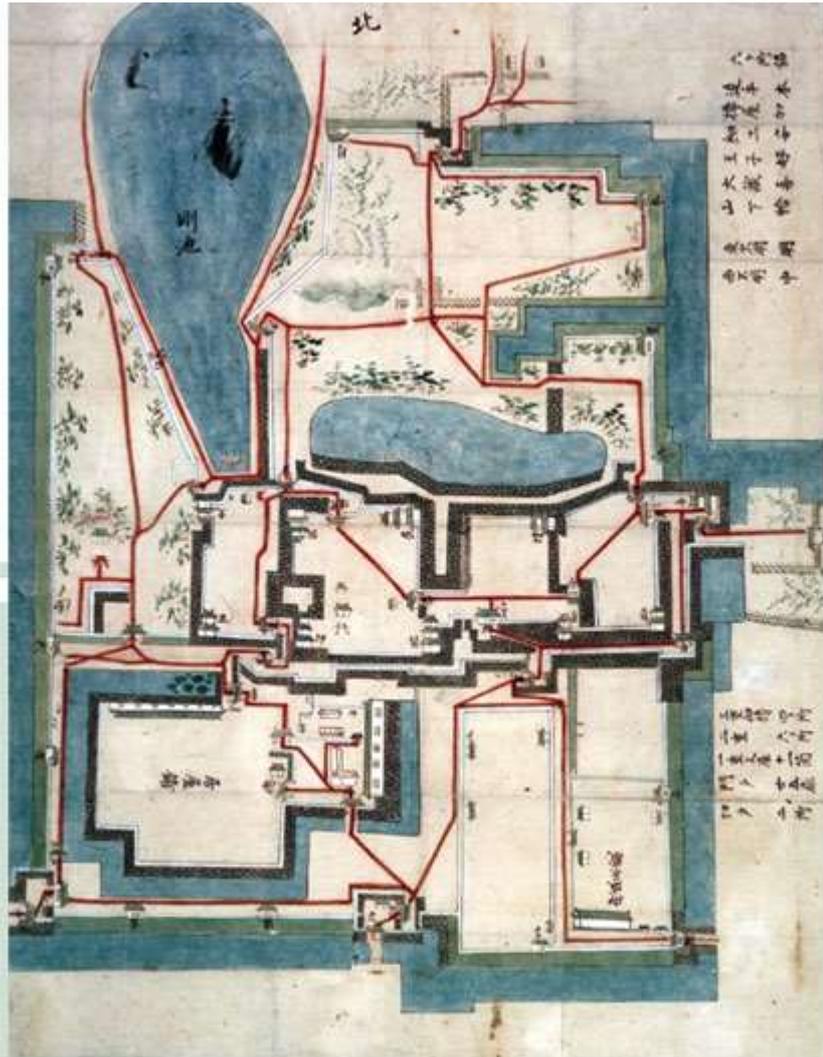
1619年築城の**明石城**（国指定重要文化財）を誇る、兵庫県立**公園**です。JR・山陽「**明石駅**」北口より徒歩5分。駐車場2カ所完備。甲子園球場約13個分もの園内には、芝生広場・水辺ボート・球場・スタジアム等の運動施設も備えます。春は桜、秋は紅葉も楽しめます。

徳川の「鬼孫」が威信をかけた、築城プロジェクト

---

西国諸藩に対する備えの要所である「明石城」の築城。元和4（1618）年、徳川二代将軍秀忠が命じた、中央政権による国家プロジェクトでした。建設費用は銀1000貫目、今でいう31億円規模の一大事業です。

初代藩主は、**小笠原忠政**（1596～1667年、後に忠真と改名）。織田信長と徳川家康を曾祖父に持つ、戦国のサラブレッドです。家康は、大坂夏の陣での忠政の奮迅ぶりを「わが鬼孫なり」と絶賛しています。



明石城絵図（明石市蔵）

築城には、姫路城主・本多忠政（小笠原忠政の義父）が指導役となり、立地や設計に深く関わりました。小笠原・本多の両忠政2人が、建物の配置を決めたと記載された絵図も残っています。城主忠政は、元和5（1619）年正月に着工、塀や門、家造りを担当します。その年の8月には、本丸・二の丸・三の丸の石垣や塀も完成。高石垣や、本丸・二の丸・三の丸は門で区切るなど、戦闘を強く意識した構造で、西国街道と明石海峡を監視する宿命を色濃く反映した城であったことが窺えます。

明石を見守り続ける「巽櫓（たつみやぐら）」と「坤櫓（ひつじさるやぐら）」。約400年前の築城当時から残り、まさに”時のまち・明石”を象徴する存在です。全国に12基しか存在しない現存三重櫓のうちの、貴重な2基であり、国重要文化財に指定されています。

櫓の名は方位を表し、坤（ひつじさる）は本丸の南西・巽（たつみ）は南東にあることに由来します。

天守は建てられませんでした。長さ380m、高さ20m超の石垣の上に築かれた本丸の四隅に三重櫓は勇壮を誇りました。城域も当時のままに保全されています。

## 【用材】



一国一城令により取り壊されることとなった、船山城から移築された。

寛永の大火により焼失し、再建。

昭和57(1982)年に行われた大改修の際、柱や垂木(たるき)、梁(はり)に使われた全ての木材は、規格品により統一され、当時の最新技術で新築された。

廃材は一切使われていないことが、阪神大震災後の平成12(2000)年の復旧工事の調査で明らかになった。

松材が多く使われている。

## 坤櫓(ひつじさるやぐら)

桁行6間(10.90m)、梁間5間(9.09m)、高さ7間2尺9寸(13.60m)、入母屋造(いりおもやづくり)。

巽櫓よりも一回り大きく、天守閣が造られなかった明石城では、最大規模の櫓。

天守台のすぐ南にあり、実質的には天守閣の役割を果たしたとみられる。

小規模な国内の城の天守よりも、大きな規模の櫓である。

棟の向きが異櫓とは異なるのは、あえて向きを揃えないことで、一方向から弱く見えないよう＝攻められにくいよう配慮された為である。

また、平側（建物の長い側面）が西側を向いている。

明石より西の大名を監視し威風を示すため、南西側の坤櫓を大きく造り、さらに壁面積の広い平側を西向きに建てたとされる。

京都の伏見城から移築されたとの記録が残り、昭和 57（1982）年の大改修で、構造上、他から移されたものであることが解明された。

これにより、伏見城からの移築説が裏付けられた。

### 異櫓（たつみやぐら）

本丸の南東端に築かれた三層の隅櫓である。

桁行き 5 間(9.09m)、梁間 4 間(7.27m)、高さ 7 間 1 寸(12.19m)、各層の高さは約 3 m。

妻部を東西に置く入母屋造（いりおもやづくり）で、南を向く。

明石公園では現在菊花展を開催中



### 時打ち太鼓ロボット

時の町 子午線の町 明石

子 丑 寅 卯 辰 巳 午 羊 申 酉 戌 亥

明石は子午線の通る町 として有名です。この子午線とはいったい何でしょう。

近代的な時刻制が無かった江戸時代、お日様の動きに合わせて、太鼓や鐘で時刻を知らせて

いました。子午線の 子はネズミ 午は馬 十二支の中心線に当たります。

子の刻(ねのこく)とは夜中の12時。 午の刻(うまのこく)とは昼間の12時。

また、時刻と同時に方角も指しています。

子は北、 午は南。 つまり子午線とは南北線の事 ちなみに東は卯(う・ウサギをあらわす) 西は酉(とり)

東北は艮(うしとら) これは丑寅(うしとら)の意味で丑と寅の間に当たるからです。

東南 は 巽で辰と巳の中間 南西は坤 で未と申の間

北西は乾 戌と亥 の中間

子午線は南北線ですからどの町にも通っています。明石は東経135度の見えない線が通っています。何故、明石なのか？東京でもなし、京都でもない。これは天文科学館のところで書いた経緯を経て決まりました。

明石公園入り口

#### 中部幾次郎(慶応2年1866～昭和21年5月1946)銅像

銅像は昭和3年(1928)に日本の水産界の先駆者を顕彰するために建立されたが戦時中、金属供出で消失。昭和26年(1951)再建。大洋漁業(現 マルハ)の前身・林兼商店の創始者。6人兄弟の次男。父親の兼松は生鮮運搬卸業 林崎出身の父兼松にちなみ『林兼商店』。押し送り船で大阪の雑喉場まで15時間天候や潮の流れを見ることに長けていました。小型蒸気船を引き舟に借り受け、しけでも早く運搬でき、利益を上げました。

大阪で行われた第5回勸業博覧会に行き、川を走るアメリカ製の巡航船を見て、発動機つき鮮魚運搬船を考案『新生丸』12トン、8馬力の船で明石から下関に回り、日本海に乗り出し、近海で活躍。しけで朝鮮半島に流されたり、……このような様々な体験や試練を潜り抜け工夫と努力で事業を発展させました。事業所を下関に移し、単に生鮮魚の運搬だけでなく、造船鉄工所を設立して、いち早く冷蔵冷凍船をつくるなど、昭和11年(1936)には大洋捕鯨株式会社を設立し、南氷洋捕鯨に進出の為、捕鯨母船『日新丸』(16811トン)を建造。戦前は朝鮮半島に土地を購入し、米を作り、漁業基地の食料供給を行った。

明石に住所を長く置き、明石中学(現在の明石高校)、明石高等女学校、などの建設に多額の寄付を行ったり、貴族院議員に勅撰されるなど、明石では立志伝の筆頭格の人。

皆様 またお愛しましょう